

高等学校図書館活用の授業実践記 2 点の比較と分析

西 卷 悦 子*

Comparison of Three Accounts of Lesson Practice and Analysis of High School Library Practical Use

Etsuko NISHIMAKI*

要 約

1989年の第6次学習指導要領改訂から1998年の第7次学習指導要領改訂までの学校図書館を活用した授業はどのように展開されたのか、塩見昇・土居陽子『学校司書の教育実践』（1988）、神奈川県高等学校教職員組合学校図書館教育小委員会編『図書館よ！ひらけ、授業いきいき学校図書館』（1990）の2点を対象として検討する。分析の枠組みを、(1) 教科による授業の改革、(2) 学校図書館の教科教育への支援活動、(3) 学校図書館を活用した授業と学校図書館の連携の3点として行なった。その結果、教科のアイデンティティへの模索と学校図書館のアイデンティティへの模索が連携の契機であること、成果は学校経営に反映されていたことが明確になった。そのことから、学校経営は教科の専門性を支援する学校図書館活動を視野に入れる必要が示唆されている。その実現のためには、内部の連携だけでなく、外部からの組織的支援も重要であることが確認できた。

Abstract

How did the lessons that utilized school libraries develop during the years from 1989 (the 6th Revision of the Governmental Teaching Guidelines) to 1998 (the 7th Revision) ? Two documents have been chosen as the framework for the close analysis of the changes in class management in that period: *Teaching practice for School Librarians* (1988) by Shiomi and Doi, and “*Open up libraries! Libraries for lively class activities*” (1990) edited by School Library Educational Subcommittee of Kanagawa High School Teachers' Union. Three criteria have been chosen for the analysis: (1) class reform in curriculum, (2) educational support offered by school libraries, and (3) cooperation between school libraries and curriculum management. The result of the analysis shows that groping for identity both in subjects and school libraries has given impetus even to the improved school management. That leads to the conclusion; in educational scenes, school libraries should be valued and utilized more for their supportive activity in order to develop each subject's specialty. Systematic support from outside school for school libraries, and effective cooperation inside are essential elements for the educational evolution in the future.

*駒沢女子大学 非常勤講師

1 はじめに

1.1 研究の背景と課題

近年、高等学校教育における高等学校図書館利用の重要性が改めて指摘されている。そのことは、東京都教育委員会が第二次東京都子供読書推進計画¹⁾において「生徒の情報収集や自発的な学習を促進」させ、「校内体制の整備及び学校図書館の充実を図」ろうとしていることに顕著にあらわれている。また、2009年3月に告示された高等学校学習指導要領では「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実すること」と規定された²⁾。

しかし、現状では、全国学校図書館協議会が2013年に行った『子どもたちの読書と学校図書館の現状』によると、学習指導要領の改訂に対応していると答えた高等学校は、小学校79.2%・中学校42.5%に比べ、高等学校は、17.3%と低い。対応の内容は蔵書構成の見直しをしたが小学校68.0%、中学校63.6%、高等学校63.6%と最も高く、学校運営方針に図書館の活用を明記したのは小学校32.4%、中学校31.2%、高等学校22.7%に留まっている³⁾。高等学校の教育における学校図書館利用は今なお定着していないと考えられる。

1.2 研究の目的

本稿の目的は『学校司書の教育実践』(1988)⁴⁾と『図書館よ、ひらけ! 授業いきいき学校図書館』(1990)⁵⁾の学校図書館を活用した授業実践を対象に学校図書館を使った授業を分析検討することである。30年余も前の試みであり、現代の教育状況とは異なる点もあるが、高等学校教育課程における学校図書館の授業と読書を推進した実践記の特徴を整理し、それらを比較し再評価をすることで、あらためて学校図書館を使った授業とは何であるか、それが学校経営に

どのように影響したのかを考察する。これらは、学校図書館の授業における活用とその推進の方策について何らかの示唆を与えてくれるものであると考える。

1.3 先行研究

長倉美恵子の『世界の学校図書館』⁶⁾をはじめ、学校図書館の理論と活用に関するすぐれた著作は多数出版されている⁷⁾。それにもかかわらず、高等学校の学校図書館の授業に特化し、授業での実践を紹介した著作は極めて少ない⁸⁾。そのような中で、高等学校の授業での実践として高く評価されている⁹⁾ものに、土居陽子が学校司書として教科を支援し、教科の授業実践を記録した『学校司書の教育実践』(1988)がある。また、有吉末充が中心となってまとめた神奈川県高等学校教職員組合図書館教育小委員会による、学校司書や教科教諭による授業実践を綴った『図書館よ、ひらけ! 授業いきいき学校図書館』(1990)が刊行され高い評価を受けた¹⁰⁾。しかし、これらの授業実践に関する分析と考察はなされていない。また、1995年に刊行された司書教諭である稲垣信子の『理想の学校図書館』¹¹⁾に教科との連携の実践報告がみられる。しかし、本稿では、専任司書教諭が置かれた東京都の事例を同列に扱うことは、検討課題の考察を行う上で同列に扱うことが困難なため、稲垣の実践は後日の検討課題とする。

1.4 研究の方法

研究の方法は文献研究である。文献の分析結果を検討整理し表作のうえ、分析する。なお、()内の数字は該当する其々の引用頁を示したものである。

1.5 実践記2点の概要とキーワードおよび分析の枠組み

『学校司書の教育実践』(1988)は、塩見昇・土居陽子の共著で刊行されているが、内容の多くが土居陽子の15年余の学校司書としての仕事を記録したものである。兵庫県神戸市立西宮東高等学校の各教科の教諭とどのような協力関係を模索し、実践してきたかという記録である。塩見昇は「はじめに」と「あとがき」および、1章と5章において、学校図書館利用教育の定義と高等学校図書館の現状分析を執筆し、土居が、兵庫県神戸市立西宮高等学校における学校図書館利用教育の実践報告を執筆している。本稿では、土居の実践報告部分を対象とする。

『図書館よ、ひらけ！ 授業いきいき学校図書館』(1990)は、図書館教育に関心を持つ神奈川県立高等学校の複数の教職員が各校の図書館活用の教育実践を本にまとめたものである。本書は神奈川県高等学校教職員組合が有吉末充(大沢高等学校学校司書)を中心として、図書館教育小委員会を組織し、教育研究活動の一環として、各教科担当者および学校司書が教科と連携し授業支援を行い、その授業内容と実践のプロセスが書かれている。両者が一つの事例について、授業内容と支援を並列して報告している。執筆者は有吉末充ほか神奈川県高等学校教職員組合小委員会の21名である。本稿では、教科の実践報告部分を対象とする。

a. 学校経営

学校経営とは、各学校が設定した学校教育目標と教育理念・教育方針に基づき、その目標を実現するために必要な人的・物的・経済的・運営的諸条件を有効・適切に活用して体系的・組織的に取り組む教育活動である。人的条件とは、学校の教師数や児童生徒数にあらわされる学校・学年・学級規模、教師集団・児童生徒集団の特質、教師集団の意識と行動の類型などを

いう。物的条件とは、校地・校舎、学校図書館、コンピューターなどの施設・設備をいう。経済的条件は教育費の財源をいう。運営的条件には、教育行政方針、教育課程行政、校長・教頭・主任等リーダーの資質等があげられる。これらの各条件間の関連により運営されているのが学校経営である。学校経営には、学校運営のための分掌組織、教務組織、事務活動、研修・研究の組織、組織間の連携が含まれる。

b. 学校図書館を活用した授業

学校図書館を活用した授業とは、教科授業の一環として教科担当者と学校図書館担当者と学校図書館の設備や資料を活用して行なう教育活動である。

c. 学校図書館経営

学校図書館経営とは、学校教育の理念に基づき、その目標を実現するために必要な人的・物的・経済的・運営的諸条件を有効・適切に活用して体系的・組織的に取り組む活動である。学校図書館の教育課程の展開への支援とは、司書教諭および学校司書が連携・協力し、学校図書館の施設と設備を活用して教師の教育活動や児童・生徒の学習を支援するために行なう活動である。

以上に基づき分析の視点を以下のように設定し、分析する。

(1) 教科による授業の改革

教科による授業活動の内容、学校図書館による支援の具体例、生徒の学習等に関する記述、活動への評価に関する記述を抽出し分析する。

(2) 学校図書館の教科教育への支援活動

学校図書館担当者が連携・協力し、学校図書館の施設と設備を活用して教師の教育活動や児童・生徒の学習を支援するために行なう活動である。

(3) 学校図書館と教科における連携の形成

学校経営の物的条件の一つである学校図書館を

対象とし、校内組織における呼称と学校図書館の組織の有無について抽出し分析する。*参照：担当の職位、校内あるいは校外での研修・研究 表1

表 1

高等学校図書館活用授業の実践記

書名	編・著者	実践校	目次
1988 学校司書の教育 実践		兵庫県神戸市立西宮東高等学校	はじめに 1 学校図書館の教育力 2 教科との連携 一 ズームイン・パート1 二 教科との連携をめざして 三 H先生との取り組み 四 Y先生との連携 五 選択授業を中心とした様々な連携 六 教科との連携のなかで見た生徒の実態 七 教科との連携をとおして思うこと 3 学校図書館における資料提供 一 ズームイン・パート2 二 学校図書館における貸出 三 本校図書館における予約（リクエスト）制度 四 よりよい資料提供に向けて 4 学校司書としての私の軌跡 一 学校図書館に働く 二 学校司書として 三 おもいつくまに 5 学校図書館に人の配置を 一 いま学校図書館の現場では 二 「人」を欠いた学校図書館は合法か 三 法改正運動の動向 四 ひとの配置を実現するために あとがき
1990 図書館よ、ひらけ、 授業いきいき学校 図書館		神奈川県立藤沢高校、 神奈川県立藤沢北高校、 神奈川県立柿生西高校、 神奈川県立麻生高校、 神奈川県立横浜緑ヶ丘高校、 神奈川県立川崎南高校、 瀬谷西高校、 神奈川県立海老名高校、 座間高校、 神奈川県立百合丘高校	はじめに この本を読まれるあなたに 第I部 図書館教育の実際 1 理科 2 数学 3 国語 4 理科Iと理科II 5 社会 6 音楽 7 学校行事 第II部 図書館教育を可能にする条件整備とは？ 1 図書館教育とは何か？ 2 学校図書館とは何か、理論の構築 3 図書館に専任の専門職員を！ 4 図書館実践のために 5 神奈川県における図書館活動 6 図書館を必要とする授業を阻む要因 7 図書館との連携を可能にする授業とは？ 第III部 Let's Discuss 学校図書館はどう変わっていくか 1 古い学校図書館から 2 新しい学校図書館法？ 3 図書館が変わる 4 図書館教育はレジスタンス運動だ 5 リラックスできる場所に 6 生徒との係わりのなかで 7 生徒が求めるもの 8 生徒とつくる 9 個人が尊重される社会を目指して

2 教科による授業の改革と評価

2.1 『学校司書の教育実践』(1988) から

保健体育での(公害についての調べ学習では、調べ学習で学校図書館を利用し、生徒の発表は比較的高いレベルまで到達した『研究紀要

11』に報告がなされ、社会科での平和学習の小論文・レポート作成では、来館者が増加し、校内の評価を得て調べ学習のための資料の充実につながった。*参照：表2

表2

学校図書館を利用した授業の評価

書名	高等学校名	学校図書館の利用	生徒の学習活動	評価
		保健体育での(公害についての調べ学習	資料貸出、質問、来館者の増加	調べ学習で学校図書館を利用し、生徒の発表は比較的高いレベルまで到達した『研究紀要11』。
		社会での平和学習の小論文・レポート作成	来館者の増加	調べ学習のための資料の充実につながった。
		国語での調べ学習と発表	まとめた本づくり	製本した本を蔵書としたため生徒の来館が増えた。
図書館よ、ひらけ、授業いきいき学校図書館	県立麻生 県立川崎北 県立柿生西	理での地質調査や進化のレポート	資料探索、レポート作成	資料が増加し、担当者交代でもレポートが継続している。そのため生徒の資料探索に熟達した。
	県立横浜緑ヶ丘	数学での授業課題	資料探索、レポート作成	生徒が作業課題を完成することで図書館をさらに利用するようになり、図書館が個別に対応することへの評価を得た。
	県立大沢	理科と現社での合同レポート(原子力・食品添加物)	資料探索、レポート作成	生徒の資料利用が市立図書館や本屋の利用等多方面に広がった。
	県立大沢	理科IIでの探究学習	資料探索、レポート作成	生徒の自主的な活動“取材”が行なわれたという発展的学習につながった。

2.2 『図書館よ、ひらけ！ 授業いきいき学校図書館』(1990) から

県立川崎北高校・麻生高校・柿生西高校の理科の授業で、地質調査や進化のレポートのために資料探索を行ない、レポート作成を行なったため、関連資料が増加し、担当者交代でもレポートを課す授業が継続した。そのため生徒の資料探索に熟達が見られた。県立横浜緑ヶ丘高校では、数学での授業では資料探索の後、レポート作成が課されるため、図書館が生徒の資料探索に個別に対応するという事で評価を得た。県立大沢高校では、理科と現代社会での合同レポート(原子力・食品添加物)のための資料探索が行なわれるため生徒の資料利用が市立図書館や本屋の利用等多方面に広がったということで評価を高めた。県立綾瀬高校では理科IIの探究学習において生徒の自主的な活動として“取材”が行なわれ、活動が評価を得た。*参照：表2(学校図書館を利用した授業の評価)

3 学校図書館による教科教育への支援活動

3.1 『学校司書の教育実践』(1988) にみる学校図書館の支援

国語での単元の学習には関連資料の参照が必要であるとの要請を受け、資料の別置を行ない、授業で資料の紹介をしている。保健体育では公害についての調べ学習を行ない、資料リストの作成、ブックトークの支援、生徒へのレポート作成のためのマニュアルプリントを用意している。また、公共図書館との連携も行っている。社会では、平和学習の小論文やレポートのために、生徒への資料提供に役立てようと件名検索用の書評カードを作成し提供している。さらに、国語科の調べ学習と発表の授業では資料提供と同時に、調べたものをまとめるために学校図書館は、製本の指導を行なった。*参照：表3

表 3

学校図書館活用した授業への学校図書館からの支援

書名	学校図書館の利用による授業改善	学校図書館による支援
学校司書の 教育実践	国語での単元の関連資料参照	資料の別置、授業での紹介
	保健体育での(公害についての調べ学習)	資料リスト、ブックトーク支援、レポート作成プリント、公共図書館との連携
	社会での平和学習の小論文・レポート作成	資料提供、書評カード(件名検索用)
	国語での調べ学習と発表	資料提供、製本の指導
図書館よ、 ひらけ、授 業いきいき 学校図書館	理での地質調査や進化のレポート	ブックリスト
	理科での進化のレポート	ブックリスト
	数学での授業課題	生徒の資料探索の手助け、資料の探し方、まとめ方への支援
	国語でのテーマを設定しての読書記録	迅速な資料提供、目録の別置
	理科と現社での合同レポート(原子力・食品添加物)	教科との打ち合わせ、資料提供理科でのレポート教科との打ち合わせ、資料提供、オリエンテーション、ブックリスト
	理科IIでの探究学	教科との打ち合わせ、資料提供
	社会でのテーマ学習	教科との打ち合わせ、資料提供
	音楽でのグループ研究(日本音楽)	利用の仕方オリエンテーション、ブックリスト、資料提供、
	現代社会での自主編成平和学習テキスト	図書リスト、ブックトーク

3.2 『図書館よ、ひらけ！ 授業いきいき学校図書館』(1990) にみる学校図書館の支援

理科の地質調査や進化のレポートでは、学校図書館はブックリスト作成を指導し、支援している。理科の進化のレポートではブックリストを作成している。数学の授業課題には生徒の資料探索の手助けとして資料の探し方、まとめ方を指導し支援している。国語のテーマを設定しての読書記録では、迅速な資料提供のため、目録の別置を行なっている。原子力や食品添加物等の理科と現社での合同レポートでは、教科との打ち合わせを行ない、資料提供をしている。理科のレポートや社会のテーマ学習では、教科との打ち合わせやオリエンテーションを行ない、ブックリストを作成している。*参照：表3(学校図書館を活用した授業への学校図書館からの支援)

4 学校図書館を活用した授業と学校図書館の連携

4.1 『学校司書の教育実践』(1988) に見る連携

2章3節でHとの取り組みについて記録している。Hは体育科の教師で、図書館に参考図書を探しに来たところだったが、土居が声を掛け、連携へと話が進んだ。そこで、教科担当者

と学校図書館の事前打ち合わせと準備が実現し、Hによるブックトークが実現した。連携の経過は、Hによる西宮東高等学校の『研究紀要II』(51-55)に報告がある。Hは、最終的には「三分の一足らずの者しか到達しなかった」(53)が、全員が身近な問題としてとらえたという報告している(55)。土居はレポート作成のための補助資料として作成したプリントと、別置図書一覧を開示している。2章4節では、Yとの連携が記録されている。連携の内容は社会科の授業に図書・視聴覚を利用した平和学習を行ったものである。その実践は西宮東高等学校の『研究紀要II』に、Yのレポートが掲載されている。通年の授業展開の構造が図示され、生徒の活動、教師の指導、評価までの段階がみえる。Yの実践では、図書館の利用目的を主体的学習姿勢と科学的認識を深めることに置き、評価基準を、事前に生徒に明示したことに特徴がある(66-67)。Yは、主体的学習を促す取り組みでは、「図書館との連携が、その成否の重要な鍵をにぎっている」(69)と明言している。2章5節では、必修科目だけではなく、選択授業を中心とした様々な連携が報告されている。資料4「教科との連携一覧表」(1986年)には年間のシラバスと学校図書館の取り組みが一瞥できるよう

になっている(78-79)。2章七節では、教科との連携で図書館利用が増加したこと、連携の効果が示されている(88)。3章の学校図書館における資料提供では、土居は、学校図書館にお

ける貸出しは資料提供の基本であるということ、を教科との連携から学んだと述べている(100-101)。*参照：表4(教科と学校図書館の連携への契機)

表4

学校経営の視点

書名	高等学校	学校図書館組織名	学校図書館担当職位	研修・研究組織(内部or外部)	連携への契機
学校司書の教育実践	神戸市立西宮東	学校図書館	実習助手→学校司書	学校図書館問題研究会(外)	研究紀要へのレポート掲載「東高図書館の現状と展望—学校司書の立場から」と図書リスト作成に向けての対話から始まった。
図書館よ、ひらけ、授業いきいき学校図書館	県立麻生	図書視聴覚部	学校司書	神奈川県高等学校教職員組合図書館教育小委員会(外)	教科のレポート作成のために教科担任による資料提供要求から始まった。
	県立柿生西	—	学校司書		教科のレポート作成のために教科担任による資料提供要求から始まった。
	県立横浜緑ヶ丘	—	学校司書		教科担任が授業中の生徒とのやり取りから学校図書館の利用をはじめ、教科の専門資料の収集を要請したことから始まった。
	県立川崎南	—	学校司書		教科担任から、授業で学校図書館を利用したいという要望を学校図書館が受けたことから始まった。
	県立上溝南	—	学校司書		教科が学校司書に図書館利用の相談をしたことから始まった。
	県立大沢	—	学校司書		教科が学校司書に授業レポートをしたいという協力の要請から始まった。
	県立綾瀬	—	学校司書		学校の個性化から、探求的な学習というカリキュラムの方向が決まり、教科が学校図書館に協力を要請したことから始まった。
	県立海老名	—	学校司書		教科の専門性に関連したレファレンスの要求から始まった。
	県立座間	—	学校司書		生徒へのレファレンスから、教科の必要を知る。教科担当からのオリエンテーションの要望があったことから始まった。
県立百合丘	—	学校司書	学校図書館担当者が学年の会議に出て情報を得たことがきっかけとなった。		

4.2 『図書館よ、ひらけ！授業いきいき学校図書館』(1990)に見る連携

川崎北高校時代の田中勉は、1980年ごろから、生物分野の導入で文庫サイズの図鑑を二人に一セットずつ持たせたことで、「単純な実験に奥行きができ、生き生きとしたものになる」と考え、「わたしはもはや図鑑なしの野外実習は考えられないとさえ思っている」との思いで実践してきた(13)。田中は生徒に身近な植物に関心を持ってもらおうというねらいから出発している(11)。また、麻生高校時代の田中の理科には学校司書の並木雅代がブックリストづくり、一夜貸出の決断と随所に工夫が見られ、「生徒にとって少しでも頼りがいのある学校図書館にしていきたい」と述べている(25)。横浜緑ヶ丘高校の数学科の岡部進は調べる課題の授業展開を、学習を効率よく進めることよりも、「数学に接しやすく、学んだ数学が少しで

も日常に生かしていけるようにしたい」という思いで、意識的に図書館の活用を行なっている(38)。生徒たちは、岡部の作業課題レポートに取り組むことにより、統計資料を借りるなど、図書館とかかわらざるを得なくなる。一方、岡部にも新たな学びや発見がある。生徒と岡部との間に、数学の作業課題を通じた切磋琢磨が継続され、「数学という教科と図書館との連携が生徒の中から生まれた」と述懐するほどである(38)。岡部の数学の場合は、授業の必要上、学校図書館に「データバンクの機能を図書館に期待している」(56)のだから、人とお金が貧困な学校図書館は「仲間による連帯と、アドバイスに負う」ところが大きいのである(65)。そして、学校司書の大川洋子は「授業の手法によって図書館は生かされている」と述懐している(64)。*参照：表4

5 考察

5.1 教科のアイデンティティ

実践記録は残らないことが多い。しかし、当時は振り返り、プリント資料や研究紀要等を丹念に掘り起こしてまとめた記録は高い信憑性を持つ。執筆に協力した教師たちの熱意と意欲に表れている。一例をあげれば、生徒と教師の探究心が結実した岡部の数学(37-56)が後年、『日常素材で数学する』、『生活数学』のすすめ』12)ほか、岡部進の多数の著作となって出版されていることに象徴的に表れている。つまり、教科はその専門性を学校図書館の資料を駆使して教科授業の内容改善を追求することによって、高等学校教育における教科のアイデンティティを確立しているのだといえる。

5.2 学校図書館のアイデンティティ

『図書館よ、ひらけ! 授業いきいき学校図書館』では、神奈川県では教職員組合のなかに図書館教育小委員会を設けたことが書かれている。20年前には、学校司書は事務職であり、教育職ではないという風潮が強かった。そのような風潮のなか、多種多様な実践が土居らの兵庫県や神奈川県高等学校で行われたのは、学校司書ら学校図書館担当者が、学校図書館を授業で活用してもらうことで、学校図書館の価値を認められると積極的に教科に働きかけたことの成果である。図書館の機能を理解して授業で活用してもらうこと、すなわち、学校教育における学校図書館のアイデンティティを確立することにほかならないのである。

5.3 成果の学校経営への反映と組織的支援

西宮東高校では、教科からの学校図書館利用教育の報告が『研究紀要』(1980年)、『研究紀要11』(1983年)にレポートとして掲載されている。そこには、意欲ある教師の存在があっ

こそ、図書館の準備が生きるという学校経営が見て取れる。土居は、それを評して学校現場が民主的でなければならないと主張している。西宮東高等学校では、『研究紀要8』(1980年)、『研究紀要11』(1983年)があり、全体の取り組みを紹介した研究記録は学校経営の成果を記録したものと見える。

また、学校経営は教科の専門性を支援する学校図書館活動を視野に入れ、教育課程編成等の学校運営がなされる必要があるが、学校経営は教科の専門性を支援する学校図書館活動を視野に入れて、教育課程編成等の学校運営がなされる必要がある。教科の学びをさらに充実したものにするには、学校の構成員である生徒は勿論、教職員や保護者等も視野に入れた、マネジメント意識を学校図書館も含めて持つ必要がある。実践記に書かれた事例では、学校長初め教職員が学校図書館を視野に入れ、カリキュラムを念頭に置いたマネジメント意識を学校経営の方向性として持っているから機能するのだと推察できる。実践校では、教科の専門性に基づく資料の充実が学校図書館経営における教育と学習を支えていることが明確に示唆されている。「図書館の自由」を保障する職場の民主的な慣行や学校長以下組織の理解が学校図書館にも向けられていたことが読み取れる。

そのためには、一校だけの実践ではなく、学校図書館問題研究会兵庫支部会等13)、神奈川県教職員組合等14)の支援が組織的になされたことが大きい。校内の連携のみならず、外部組織との連携および支援が必要なことも明確に示唆されている。

6 終わりに

教育の目標は生徒が学びの主役になるような授業を目指し、その過程で、生徒自身がテーマを決め、取材、レポート、発表等、学びの主体

は自分たちであることを実感させることだと考える。そのような過程を生み出すために、図書館利用の学習は魅力ある授業づくりに無限の可能性をもったものとなる。

今日、生徒は前述したように、受験を意識した主要教科の学びに忙殺され、学校教育の本来の目的である健全な教養の育成が学校教育の隅に追いやられる傾向にある。

本論稿は、高等学校の学校図書館関係者にとってあまりに有名な、しかも20年余も前の実践記の特徴を整理、比較し再評価したものはあるが、教育の枠組みは変わっても2009年現在も、20年前も現場の事情や意識は変わっていないと感じる。そこで、書籍となった高等学校の実践記を代表するものとして、この2点を取り上げ、教育課程の実行において学校図書館利用とは何に貢献するものであるのかを明確にしようとしたものである。

考察の結果として、そこには教科の専門性に依拠した授業があり、学校図書館との連携があった。授業に学校図書館利用があることで、その成果として、生徒の主体的な読書への動機づけとなり、さらに主体的な学びの契機となっていたことがわかった。

高等学校では、2011年から年次進行で実施された改訂学習指導要領による授業が実施されることになった。学校図書館を取り巻く環境が激変しようとしている今、これら二つの実践記は、学校現場は授業における学校図書館活用はどう取り組むべきかという課題に、組織面とマネジメント面での実践へのヒントを提供してくれている。

注・引用文献

¹⁾ 「第二次東京都子供読書活動推進計画」
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/KEIKAKU/2009/03/DATA/70j35101.pdf>, p.9-

11. (参照 2009-10-1)

²⁾ 高等学校学習指導要領平成21年3月 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afeldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf (参照日 2013.9.30)

³⁾ 社団法人全国学校図書館協議会調査部『子どもたちの読書と学校図書館の現状 2012』2012.11, 社団法人全国学校図書館協議会.

⁴⁾ 塩見昇・土居陽子『学校司書の教育実践』青木書店,1988,218p.

⁵⁾ 神奈川県高等学校教職員組合図書館教育小委員会『図書館よ、ひらけ!: 授業いきいき学校図書館』公人社,1990,306p.

⁶⁾ 長倉美恵子『世界の学校図書館 学校図書館体系3』全国学校図書館協議会,1985,217p.

⁷⁾ 塩見昇『教育としての学校図書館』青木書店,1983,243 p.

⁸⁾ 小・中学校の実践記録に比べれば少ない。しかし、例えば1982年に後藤満彦が執筆した『中学・高校の利用指導の実際』がある。授業実践が全体の4分の1程度にすぎないため、本稿の対象から外した。

⁹⁾ 新村秀夫「文献解題『学校司書の教育実践』」,『学校図書館』Vol.460, 1989, p.69. 森耕一「新刊紹介 塩見昇・土居陽子著『学校司書の教育実践』」『図書館界』Vol.38,1989, p.294. 堀本孝子「『学校司書の教育実践』を読んで」『学校図書館』Vol.461, 1989, p.58- p.59.

¹⁰⁾ 河井弘志「書評『図書館よ、ひらけ!』」『図書館雑誌』Vol.85, 1991, p.44.

¹¹⁾ 稲垣信子『理想の学校図書館』筑摩書房, 1995, 201p.

¹²⁾ 岡部進『日常素材で数学する』ヨーコインターナショナル,2008, 岡部進『「生活数学」のすすめ』ヨーコインターナショナル,2008.